

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	世田谷区
園名	南八幡山保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

子どもの創作意欲がより広がる積み木あそび

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

積み木あそびを各クラス園児が行っている。作成したものをそのままの状態の数日とおきながら付け加えたり、作り直したりし継続的に取り組んでいる。創造力の広がりや、完成させた作品から異年齢の子ども同士で刺激を受けて別の物を作ろうとする姿も見られ始めているが、積み木が足りず、創作意欲を満たせない事もある。個々の持つ創作力の広がりや仲間同士のコミュニケーション力の向上を目指すため。

2. 活動スケジュール

- ・春～夏 継続して積み木遊びを楽しむうちに作品がどんどん広がりごっこ遊びに発展した(キャンプごっこ・お化け屋敷・「三匹のヤギのがらがらどん」の絵本の世界)
- ・秋～冬・積み木で街並みや、かまくらなど作品の中に入って遊ぶ作品に発展した。
- ・クラスだよりで保護者に向けて配信

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・今ある積み木に、加えていく。レンガ積み木・カプラ・動物積み木・人形・色板等豊富に揃えていった。
- ・積み木で遊べるスペースを確保、積み木に向かう時間を保障。出し入れしやすい棚も配置。
- ・大人も一緒に遊びながら楽しさを共有する。また、子どもたちのイメージを形にしたり、豊かな発想を引き出したりしていく。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ① 5歳児クラス：横への広がり ～「繋げてみよう」の一言から～
- ② 2歳児クラス：ブロックから積み木へ ～見たてている？それとも別の遊びをしている？～
- ③ 3歳児クラス：ころがしてみよう

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ① 高く積み上げてタワーを作ることが多かったが、電車が好きな児が横に広げて（駅や家など）を作るようになる。横への広がりにより、隣で作っている児にぶつかる「繋げて町にしよう」「一緒の家にしない？」という声が聞かれた。そこで保育士も加わり自分の家を作る。「この家に露天風呂作ろうかな」とつぶやくと子どもたちが「作ってあげるから先生見て」と言い、お風呂を作り自分たちの家とつなぎ合わせる。保育士は積み木の人形を近くに用意しておくことに気付いた児が使い始めた。できたものを保育士に話したその会話で思いついたものをさらに作る。しばらくそのままとおき、一部を壊してまた新しい建物を作る。
- ② 部屋のレイアウトを変え、保育士自ら積み木に触れていくことで、子どもたちも積み木遊びを楽しむ姿が多く見られるようになった。はじめはレンガ積み木だけだったが、遊んでいく中で様々な形の積み木を組み合わせて遊ぶ姿が見られている。一方で積み木を袋に詰めて運ぶことを楽しむ姿もあり、徐々に携帯電話などの物に見立てた遊びの姿に変わっていった。積み木遊びを深めていくことで、袋に物を詰めてのお買い物ごっこから、次の段階の遊びに発展した姿を感じた。また子どもから積み木に触れ、積み木の楽しさを感じられるようになってきた。
- ③ カプラ、箱積み木を使って、それぞれの作品ができる。どちらも、レールを使ってボールが転がす積み木を作っている。片方は見えないレールにボールが転がっていく。どちらも転がしてみると壊れて、「あ～！」と声を荒げることもある。保育士がどんな風にしていきたいのかイメージを言葉に替えていく。同じ積み木でも、2～3人の違うグループで継続して楽しんでいる。室内環境を変えたことで、作ったものを取りおいておくことができた。積み木の量が十分あることでイメージしたものを表現することにつながった



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ① 今までの積み木の遊びの様子から、自身で作りたい気持ちが強いと感じ、見守ることが多かった。作り方に変化が見られてきたので、保育士も一歩踏み込んで参加する。子どもたちはできてきている過程を保育士に話してきた。自分のイメージが言語化されることにより、考えが整理され、更なるイメージが湧くきっかけにもなったと感じた。保育士も『こうしたら面白そう』となげかけることで一緒に楽しむことができた。
- ② 積み木をお買い物ごっこの紙袋に入れて遊ぶことについて職員間で話し合う。
積み木は積み木、ままごとはままごとと分けているという意見が多かった。その中で遊びを見ているとイメージをもって積み木を使って遊んでいる姿と、やみくもに紙袋に入れているように見える姿両方があるように感じる。何に見立てているのかを考察することが大事であると感じ、今後子どもたちの姿から子どもの気持ちを理解していこうと継続して子どもの遊びを見ていくことにした。保育士が子どもの姿を理解することで子どもが積み木の使い方や見立て方も変わっていった。考えを共有することが大事であるため、今後は子どもの気持ちを理解した見方を重視していくことにしていった。
- ③ 高さを出して積み木を重ねるようになったり、斜面を使って球を転がしたりして遊びたい姿があったことから、それを積み木でできないかを考え、レールや球の積み木を室内に設置した。楽しみながら、違うイメージにかわっていく子ども、より深く追及していく子ども、と姿が違う発見をすることができた。興味や発達によっても違うことに気づくことができた。友だち同士でやり取りを重ね、継続する遊びである、積み木遊びの楽しさを一緒に味わうことができた。